

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：10101

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24653111

研究課題名(和文) リスク社会論のための概念的フレームワーク構築とリスク化指標の抽出

研究課題名(英文) Construction of a Conceptual Framework and indices for the Sociological Risk Theory

研究代表者

長島 美織 (NAGASHIMA, Miori)

北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・准教授

研究者番号：20241391

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の主眼は、リスク社会論(特にベックのもの)の根底にある概念枠組みを抽出し、社会がリスク化するというは具体的にどのようなことを意味するのかについて考察を行うことであった。この課題に答えるため、大きくわけて、3つの領域を検討した。ひとつは、近代化論の再検討であり、リスク概念の考察とともに、これをマンハイムの時代分析やイデオロギーに関する論考をもとに、検討した。2番目の領域としては、サブ政治を軸とした現代社会におけるリスクとその政治性に関する研究である。3番目の領域は、環境問題、特に持続可能性との関連から、リスク化について検討した。

研究成果の概要(英文)：Main purpose of this study was to extract basic conceptual framework of Beck's risk society theory and investigate on what really it means that a society becomes risky. In order to approach these questions, we researched mainly on three inter related areas. One is on modernization, which we approached on the basis of Mannheim's theory on ideology and utopia and diagnosis of the era. Secondly, we approached to the issue focusing on the political aspects of risk in modern Japanese society. Thirdly, we researched about riskiness by conducting some mental experimentation in which by adapting sustainability theory we asked what if environmental condition gets worse to the point that we cannot even take any major risks.

研究分野：リスク社会論

キーワード：リスク 再帰的近代化 サブ政治 責任

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、本研究に関連する先行研究としては、3つの研究分野を想定した。1つは、Kuhn(1962)を代表とする科学論におけるパラダイム研究、2つ目は、Beck(1986,1999,2006,2009)を中心とする一連のリスク社会論および、近年の山口(2002)、今田他(2007)、三上(2010)や鈴木他(2011)を代表とする日本における個人化や公共性を踏まえた詳細な分析、そして3つ目は予防原則、サステナビリティなどの環境保護と開発に関する研究群である。

2. 研究の目的

このような学術的背景のもと、本研究では以下の2つの課題を達成することを目的とした。

(1) 「リスク社会論」のための概念的フレームワークの構築

ベックのリスク社会論をもとにして、個人化、サブ政治、再帰性、公共性などのリスク社会分析に特徴的で重要な概念を取り出し、それを社会科学の伝統のなかに位置づけることによりそれらの分析装置のなかの隠れた概念を発掘する。

(2) リスク社会度判定のための指標の抽出 理論と現象の架橋

(1)の分析をもとに、それが翻ってどのような社会現象と結びつくかを、具体的に様々な社会現象に踏みこんで詳細に検討する。これを通して、各々の社会がリスク化するとはいかなることかに関する考察を行う。

3. 研究の方法

ベックのリスク社会論における主要概念の洗い出し

ベックはどのように社会学的リスク研究に挑んだかということ吟味することから始め、リスク社会論のための主要概念としては、個人化、サブ政治、再帰性、民主化、階級などの概念について、他のリスク論(ルーマン、フーコー、ダグラス)の系列との比較対象により、その特徴をつかみ出す。

思想的系譜を探る 隠れた概念の探り出し構築

上で抽出したそれぞれの概念についてその概念のもととなる思想的系譜を探る。ベックの背後にいる思想家(マルクス、ヴェーバーなど)を意識することにより、隠れた概念の探り出しを行った。特に、マンハイムのイデオロギーに関する論考、時代診断に関する概念設定などを参照する。

4. 研究成果

リスク社会論のための概念枠組みの抽出とリスク化の意味合いに関する検討を行った。まず、リスク論全般に関して、簡単なレビューを行い、リスクへの自然科学的アプローチや、経済学的アプローチ、心理学的アプローチなどに加えて、リスク社会論的考察が必要とされる所以について既存の論考をもとに明確化した。

次に、マンハイムの時代診断やイデオロギーの論考をもとに、ベックの再帰的近代化論を再検討し、リスク社会論のための概念枠組みの検討を行った。特に、グローバリゼーションとの関連において、一元化されつつある科学的リスク評価のもつ政治性について詳しく探求し、その功罪や意義について吟味した。

また、リスク評価や分析、そしてリスク管理に必然的に入り込んでくる政治性に焦点

をあて、ベックのリスク社会論、とりわけサブ政治論を中心として、フォーコーのガバナンス・タリティアプローチやルーマンのシステム論に根ざした考察、そして、メアリー・ダグラスの文化的リスクへのアプローチを考えにいれ、それらの概念的共通性や関連性、そして相違などをより詳しく探求した。

具体的な成果としては、科学、メディア、国家の視点から現在のグローバル化する社会におけるリスクの分配と責任、リスクをめぐる言説についての考察を行い、『拡散するリスクの政治性』として、一冊の著作にまとめた。これは、英国の研究者との共著であり、グローバルな研究協力に基づく成果である。この書籍に含まれる論考も、尖閣問題、フクシマに関する新聞報道の分析、そして放射線リスクをめぐる科学的評価のもつ不確実性とその含意に関する論考を含んでおり、現代的な意義をもつものと言える。

このほかに、社会のリスク化に関して、サステナビリティという概念と関連づけ、環境劣化という自然科学的現象と、それが社会にもたらす影響や意味合いについて考察し、従来あまり関連づけられていなかった双方の概念を、リスク化を巡って有機的に結びつけた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7 件)

1. 鈴木純一 「社会システムの環境としての公共圏」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』20, 3-15, 2015 (平成27年) 査読有
2. 鈴木純一 「メタファーとメディアの関係性に関する一考察: 「接続/切断」と「同一化/差異化」の相互性」『メディア・コミュニケーション研究』68, 95-108, 2015 (平成27年) 査読無
3. Yamada, Kichijiro, 'On the

Preconditions for the Appearance of "Public Communication" in the Mass Media: A New Introduction to Media Studies', 『メディア・コミュニケーション研究』68, 109-134, 2015 (平成27年) 査読無

4. 長島美織 「環境リスクと健康リスク」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』19, 31-43, 2014 (平成26年), 査読無
5. 長島美織 「社会のリスク化と持続可能性」『メディア・コミュニケーション研究』67, 79-94, 2014 (平成26年), 査読無
6. 長島美織 「リスク概念の多元性と統合性について」『メディア・コミュニケーション研究』65, 37-45, 2013 (平成25年), 査読無
7. 山田吉二郎、江口豊 「客観的可能性という概念とその若干の応用について」『メディア・コミュニケーション研究』64, 39-66, 2013 (平成25年), 査読無

[学会発表](計 3 件)

1. 長島美織, 糸川悦子, 小塚洋平 (発表者: 糸川) 「東日本大震災由来災害廃棄物の広域処理をめぐるリスク セクターモデルの観点から」日本リスク研究学会第25回年次大会, 滋賀大学 (滋賀県彦根市) 2012年11月11日 (平成24年)
2. 山田吉二郎 「ヴェーバー理解社会学の方法論再考」ヴェーバー研究会 21 東洋大学 (東京都文京区) 2013年3月16日
3. Miori NAGASHIMA, Setsuko ICHIHARA and Etsuko ITOKAWA (発表者: 市原), "Risk Distribution of Fukushima-related Disaster Waste—From a Risk Governance Perspective," 13th Annual

International Conference in Japanese Studies with the theme “The 3.11 Disaster of Japan: Vulnerability, Loss, and Social Transformation.” Ateneo de Manila University, School of Social Sciences, Japanese Studies Program, Manila, Philippines. 2013年1月24日
(平成25年)

〔図書〕(計 3 件)

1. 長島美織/グレン・D・フック/ピアーズ・R・ウィリアムソン『拡散するリスクの政治性—外なる視座・内なる視座—』萌書房, 2015(平成27年), 1-179(内、執筆 i ~75, 翻訳 77~176)
2. 金山準「ナショナリズムから「境界の廃止」へ?」小沢弘明・三宅芳夫(編)『移動と革命—ディアスポラたちの「世界史」』論創社 2012(平成24年), 247(うち論文 pp.232-241)
3. G・ヴァッティモ、P・A・ロヴァッティ著、上村・山田・金山・土肥訳、法政大学出版局『弱い思考』2012, 374(うち担当 pp.175-259)

6. 研究組織

(1)研究代表者

長島 美織 (NAGASHIMA, Miori)
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・准教授
研究者番号：20241391

(2)研究分担者

鈴木 純一 (SUZUKI, Junichi)
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・教授
研究者番号：30216395

金山 準 (KANEYAMA, Jun)
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・准教授
研究者番号：30537072

山田 吉二郎 (Yamada, Kichijirou)
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・教授

研究者番号：40091516

(3)連携研究者

(4)研究協力者

Glenn D Hook, シェフィールド大学東アジア研究所教授, 英国